

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	森 敬良
論文担当者	主査 島 正之
	副査 若林 一郎
	副査 松永 寿人
学位論文名	Impact of quality of life on future frailty status of rural Japanese community-dwelling older adults (地域在住日本人高齢者における将来のフレイル状態に及ぼす QOL の影響)
論文審査の結果の要旨	
<p>フレイルは、生理学的予備能の低下によるストレスに対する脆弱性から、容易に健康障害を招きやすいため、その改善・悪化に寄与する要因を解明し、早期段階で介入することが重要である。地域在住高齢者を対象としたコホート研究において、フレイルの改善・悪化に寄与する quality of life (QOL) の意義を明らかにすることを目的とした。</p> <p>2016～2017年に、兵庫県丹波篠山地域在住で65歳以上の自立した高齢者を対象としたコホート研究の参加者840名のうち、2年後の追跡調査に参加した551名について、臨床背景、身体・認知機能、身体活動量、栄養素摂取、WHOQOL-BREF (WHOQOL-26) によるQOL、J-CHS 診断に基づくフレイル状態を評価した。初回と追跡調査時のフレイル状態を比較し、改善、不変、悪化の3群に分類した。QOLは、身体的領域、心理的領域、社会的関係、環境領域の4領域と全体の5項目で評価した。各パラメータを3群間で比較し、フレイル状態の改善・悪化に寄与するQOL項目を修正ポアソン回帰分析により解析した。</p> <p>初回調査時の対象者年齢は中央値72歳(68-76)、男性190名、女性361名だった。改善群は114名、悪化群は92名であり、年齢、性別、併存疾患数、教育年数、1日のたんぱく質摂取量を調整すると、初回調査時のフレイル状態がフレイル改善の最も強い予測因子であった(RR 3.24, 95%CI:1.75-6.00)。QOLの身体的領域は、初回調査時のフレイルの状態とは独立して、フレイル状態の改善と有意に関連していた(RR 1.93, 95%CI: 1.08-3.47)。一方、QOLのどの領域も、フレイル状態悪化とは有意な関連を認めなかった。</p> <p>本研究の結果、身体的領域のQOLスコアが将来のフレイル状態の改善に影響すること、高齢者においてQOLの状態とフレイル状態とは双方向的に影響を与えあっていることが明らかとなった。QOLを高く維持するような介入によって、フレイルの悪循環から脱却できる可能性を示唆しており、学位授与に値すると判断した。</p>	